

# 対話精神の探究

——ヘンリー・ヴォーン、呼応——初期と後期と

森田 孟

ヘンリー・ヴォーン (Henry Vaughan, 1621-95) はその最後の詩集『甦ったタレイアー』*Thalia Rediviva* (1678)——以後、本稿では『タレイアー』、『火花散る燧石』は『燧石』と略記——の自らの部分を、彼の最長篇詩で締め括った。まずそれを見てみよう。

ダフニス 哀歌調 〈牧歌〉<sup>(1)</sup>

DAPHNIS. An Elegiac Eclogue

対話者、ダモン、メナルカス

ダ どういう雲が、メナルカスよ、君の眉に重く伸し掛  
つているのかい、

〈日光〉を浴びている花々は決してそんなに萎れた様子は  
しないよ。

ニサはまだ冷たい〈燧石〉なの？ それとも君の〈子羊た  
ち〉が

〈柵〉からさ迷い出て〈狐〉に出逢ってしまったのかい？

メ ああ！ダモン、そんなことはない、ほくの〈子羊た  
ち〉は無事だし

彼女は親切だし、彼らはこれ以上ないほど清浄<sup>ホワイト</sup>だよ、  
しかし人生は最も穏やかな時 何を与えてくれるのかね  
そのこの上なく素晴らしい瓠<sup>かぐ</sup>を囓<sup>か</sup>る害虫<sup>(3)</sup>でないものを。  
ぼくらの喜びの日々は東の間の慰めであり 絶え間ない

悲嘆に備えてぼくたちに取っておかれるものにすぎない。

だから微笑みをもたらす〈風〉は〈風〉の類いからは身を

隠<sup>(4)</sup>しているよ、嵐は

強奪者のように突然現れては、ぼくらの家畜の群を弱って

いる時に殺すのだから。

ぼくはついこの〈五月〉に〈五月〉はまだ〈春〉酣<sup>(5)</sup>だ

が聞いたよ

あの愛想のよいピロメラが例の〈夕べの禱り〉を歌うのを。

緑の森は黄金の〈太陽〉できらきら光り

〈西方〉は全て〈銀〉のように輝いていた。一片といえど

黒雲が、ほろ屑が、染みが〈大空<sup>(ウエルキン)</sup>〉の美しさを

汚してはいなかった、何一つ雨のように顔を響めなかった

しかし夜が訪れないうちに美しい景色の〈眺め〉は変わって

激しい暗い驟雨になり、〈大気〉は電光で燃え上った、

森の優しいセイレンは<sup>(6)</sup>こうして激しく圧倒されて、その

〈暴風雨〉に自らの弱々しく疲れ切った〈胸〉を与えた。

ぼくは翌日見たのだよ彼女を、彼女の最後の冷え切った寝

床の上に

そしてダフニスがそうだった、正にそうしてダフニスは死

んでいたのだ！

ダ そんな風に〈スミレ〉が、そんな風に〈サクランウ〉

が倒<sup>(7)</sup>れ

直ちに〈春〉の盛りとなり、その葬儀となる。

そういうのびやかな甘美なものはやはりその最盛期に退い

ていつて<sup>(8)</sup>ここには留まらず、〈時間〉の土壤を纏うのだ。

その間にありふれた〈花々〉は〈誰もそれを惜しまないだ

ろう たとえ過ぎ去っても〉

焼け焦げる〈夏〉へ、冷たい〈秋〉へと続いてゆく。

メ 魂には時間はいらないよ、初期の早熟の物には

常に羽が生え揃っていて喜び勇んでその〈翼〉を使う、

あるいはその大部分をね、傷つけば〈群衆〉から離れ

やはり上の方で輝くのだよ、〈雲〉の背後ではなくてね。

こういった 光をむちゃくちゃに憎み虐げるものを

夜に托すのは 公正でないのではなからうか？

あらゆる〈黒人〉を凌ぐほど二重に、そして内部まで

黒ずんでいるのは 本当に黒いムーア人<sup>(9)</sup>だよ、全く。

ダ 罰はやはり〈罪〉を明らかに表すものだね、

外側の徴が内部の病気を示すように。

また、不当に扱われている価値は一層気高い高みに達し  
〔棕櫚〕のように華やかにその重庄に打ち勝つのだ。<sup>(11)</sup>

それで我らの聳え立つ丘陵から流れるアスク川の早瀬が  
音高く別れを告げながら下ってきて泡立ちながら  
何か重要な開口静脈のような一層広い〔水路〕を

大きな豊かな流れで満たして低地の平野に水を注ぐのだ、  
ほくは〔樅の木〕を一本見たが、その堂々たる高さ

遠くに投げ出された陰は、見事な避難所になっており、  
びっしり四方八方に〔大枝〕を上げた頂上からの  
遠くの丸い形は〔森〕の精霊の家のようなのだ。

ここには〔歌合戦〕で勝ち取った〔花輪〕の数々を沢山  
老いた羊飼いたちが、あの幸せだった日々飾り紐付きの  
結び目で吊っていて、それは輝く乙女たちの貴重な褒美の  
衣装であり、真物の恋人たちが喜びとしたものだった。

そして幾たびも 老アンピオンは 所有する  
見事な〔羊の群〕をこの陰と馴染ませたのだ、

滑らかで真白い被毛の〔羊の群〕で、あの、大空が  
〔月光の輝く〕夜 見せてくれるものそのものだった。

ここに有りのままの世界が眠っていた時、ほくは、

暗い記録と気高く高度な曲目の中に 我らの

黒いがこの上なく明るい〔吟遊詩人〕の幻を見たのだ  
老アンピオンの口からしばしばたつぷり聞いていたものだ

あの 哀れにも羊飼いたちがその後経験してきたあらゆる  
災難と将来認めることになるに違いない更に多くの〔謎〕共  
々にね。

他方 若いハイラスは<sup>(20)</sup>パンの笛を吹いて 音楽を  
その歌と陰のように厳かなものにしたのだよ。

しかし その呪われた持ち主は震える頂上から  
揺るぎない淵へと あの枝々を悉く切り落としたのだ、  
それで一時間で 長い年月が育て上げたものを  
その平野の誇りと美しさが死なせてしまった。

それが失くなったことを 落ちぶれた〔田舎の若者たち〕  
は悲しい歌で悼んだのだ

冷たい暴風雨が〔十字架〕を増しなものにしているうちに<sup>(21)</sup>  
しかし〔美德と同じく〕屈服するのを蔑む〔自然〕は

その〔野原〕を新たに補充し助けたのだ、次の〔春〕  
までには 抑えられていた〔樹液〕が眠りから醒めて  
静かに上の方へと〔太陽〕を感じようとして這い昇り

遂にあの 憎むべき〔樵〕が作った傷のところ達して

そこに一層濃い爽やかな陰が現れたのだから。

メ それで栄えるわけだ 苛さいなまれた〈真理〉が！そして光もまた、消されると、〈夜〉から価値を得るのだ。

どのくらい嬉しいだろうねほくらは、一つだけきらきら光る〈星〉が

我らの〈タール〉<sup>(24)</sup>よりも黒い雲間から顔をのぞかせる時。

そう、〈摂理〉は親切だったよ、これが<sup>(25)</sup>勇敢な

〈苦しむ者〉には紛れもない至福になるよう定められるのだから、

しかもそうなるのは この短い生命いのちが終つてからであつてそれ以後は彼と共に歩み 健在なままだ彼の〈太陽〉は。

ダ だから〈羊飼いたち〉よ、やつて来て君らの青々と

した〈月桂樹〉で

彼の埃を活気づけてくれよ、何しろ君らの学に富む〈歌謡〉を愛してくれたのだからね。

ここに持つて来てほしいな その〈春〉の華やかな栄光の数々を、

そしてそれらを降り撒きながら敬虔な〈頌歌〉を歌つてく

れば

それは君らの子供たちに、しかもこれから長年に亘つて、ダフニスのことを語り続けて決して口を噤むことはないだろう。

多くの方は打ち拉がれて 彼の静まり返つた〈墓〉<sup>(27)</sup>の上に捧げ物ならぬ〈涙〉を落とすのだ、そしてあの青々とほし

ているが

を屈めて書くことにしよう

粗末な〈芝〉で悼む哀れな人々のように彼の〈墓石〉に身

不誠実で不愉快な〈散文的な連中〉<sup>(26)</sup>のためにこんな風に公

正な〈真理〉を〈韻文〉で。

「ここにダフニス眠る！ 一方、偉大な番人は

騒々しく落着きのない〈時間〉を見張つて休息する。

名声は騒音にすぎず、〈学問〉は全て思索の一つにすぎず。

褒め讃える者がおれば 無視する者もいる。

〈自然〉は双方を共に嘲り、〈機智〉は尚も騒ぎ続ける。

しかし〈死〉は知識と自信をもたらしもする。」

メ 投げ込め 君の〈花輪〉を、振り撒け 花々<sup>(27)</sup>を、

〔五月〕が微笑みながら あるいは〔四月〕が驟雨で 育  
てた花々を全て。

〔太陽〕と同じように不動のこの〔儀式〕の日々を  
〔時間〕と調子を合わせて歩ませよう、そしてどの〔時代〕  
もずっと

公衆と、我らの長い間の悲しみ及び彼の持続する休息とを  
有名な〔試金石〕にしようよ、  
そして我らがその平野を行進したり<sup>(28)</sup>

年々〔田舎の若者たち〕の〔休日〕を守る時には  
ダフニスをやはりそこに記録された名前にし、  
我らの祝祭と名聲の厳かな名譽にしよう。<sup>(29)</sup>

だつてイシス川と更に誇り高いテムズ川は<sup>(30)</sup>  
その流れの真近に彼の遺骸が収められていることを示せる  
し、その名聲は永遠に主に〔立派な〕マレイの<sup>(31)</sup>

名譽ある名前のお陰であるに違いないのだが  
それでも、ここで彼の〔星々〕が最初に彼を見たのだし  
だから運命が彼を手招きした時 それ以外の日は知らなな  
ったのだ。

こういう風の鳴る〔森〕や〔谷〕が衰えることはないし、  
アスク川の一層水音の高い〔流れ〕がこれを悲しみ嘆かな

い筈はないが

〔田舎の若者たち〕が希望を抱き〔四季〕が変化する間は  
滑ってゆくだろう 感銘深いさざめきを立てながら、ダフ  
ニスが死んだとなれば。

ダ 取り返しをつかない悲しみだね、以前と同じで、  
それから一般の悪疫と災難が引き続き起つて  
重く我らに押し掛かり、その光そのものが

〔死を悼む人〕も錯乱させて、〔夜〕のどんよりした相を<sup>すがた</sup>  
帯びるわけだ。

我らの谷々は〔死〕のそれらと同じく〔イトスギ〕や  
陰鬱な〔イチイの樹〕よりもっと悲し気に暗い闇になり、  
我らの丘陵には、高い所ほど健康には良くて

濃い物憂い〔霧〕が辺り一面にかかったままだ。  
退屈な年月の短い一部分さえ  
古い衣装と美しさを纏つて現れはしない。

花々はその〔春〕を憎み、むつつりと身を屈めて〔頭〕を  
下に突き出すので それはやはり〔根〕へと向かう、  
すると〔太陽〕は冷淡な〔恋人〕のようにちらっと  
その花々を覗き見るが まだ〔昼間の眼〕<sup>デイスマイト</sup>は眠っている<sup>(33)</sup>。

しかし〈蟹座〉と〈獅子座<sup>(34)</sup>〉が鋭く活発に

〈火〉を燃やして 花々の活気のない熱を強めてくれると  
我らの草は一途に萎びてゆき 焦げつくような日には

〈五月〉の露のように素早く我らの〈小川〉を貪り飲む。  
遂には悲しむ〈牧夫〉は飼っている〈牛〉と共に氣を失い  
空いた〈水路〉は声高な〈不満〉を述べ立てて鳴り響く。

メ 天国の当然の腹立ちと我らの不当なやり方は

〈自然〉の進路を変え、悪疫 飢饉及び衰弱をもたらす。

このため我らの土地は〈塵〉となり、空は〈真鍮〉となり  
古くからの情深い恵みの数々は呪いになってしまふ。

そしてぼくらが 未知の馴染みのない〈罪〉を覚えると  
その〈風土〉に適しい仕返しがないことになる。

あらゆる時代の澱や捏ね土が 今や<sup>(35)</sup>

滝の近くの〈川々〉のように我らの上に正に流れてくる。

ああ 幸福なダフニス！ 彼は、まだ流れが

澄んで暖かな時（ただ沈んでゆく陽の光線のせいだが）

切り抜けてゆき、あの衰えてゆく光で見たのだった、

〈夜〉にならないうちに 自分の骨折りと旅が終わるのを。

ダ 夜になれば闇は自らの鎖を掛け〈門<sup>(36)</sup>〉を嵌め

弔いの火が〈星々〉の代りに現れる。

しかし彼はずっと一日の最後の様子を見ながら

出かけてゆき、そして沈みながら（〈太陽〉のように）去

っていった。

どのような将来の暴風雨を 我らの今の罪は孵すのか

あるものは闇の中で識別し、他のものは凝視めるのだが。

予知能力も〈大嵐<sup>(37)</sup>〉が穏やかになるのは見通せないが

長い間醜態させている猛威は、この上なく激しいのだ。

しかし いいかい、こうしてぼくらの悲しみを語り合っ

ている間にも

〈太陽神ポイボス〉は一日を進み終えてしまったよ。

陰が辺りを支配し、どの〈灌木〉も更に生長したようだ、

闇は（〈権力<sup>(37)</sup>〉同様）小さな事どもを膨らませ、響きさせる。

〈丘陵〉や〈森〉は〈笛<sup>(38)</sup>〉や〈十四行詩<sup>(39)</sup>〉で円熟するし

メーメー啼く羊を我らの〈田舎の若者たち〉が家へと追い

立ててゆき、それがまた反響するわけだ。

メ 向うの〈林の空地〉からこちらへやってくるのは何

の声かな、耳を澄して

みよう、ティルシスが呼んでいるのだ、ほくにはリカンテ  
が吠えていると聞えるが。

彼の〈羊の群〉は晩く出ていつて疲れてしまい

〈灌木の茂み〉へ行つてそこで横になつていたんだ。

ダ メナルカス、急いで探しに行きなさいよ、哀れな羊  
たちは日が暮れると いそいそと眠つてしまふんだから。  
もしも悪い〈人間〉が例にして自分の時間を過ごせるなら  
彼は眠るか 死ぬか 思いのままにするかも知れないね。

メ さらにばだ 親切なダモン！今〈羊飼いたちの星〉は<sup>(39)</sup>  
美しい姿を見せながら ほくたちに微笑みかけているよ、  
遠くからだけどね。

昼間のお気に入りだつた生き物は全て  
〈太陽 と一緒に引退して去つていった。

葬送の〈鳥たち〉<sup>(40)</sup> は不愉快な調べを送り出しており、  
夜は〈物思いの〈乳母〉だか〉<sup>(41)</sup> 悲しい物想いを促進する。  
しかし〈喜び〉はまだこれから朝の光と共にやってくる、  
悲しみながら今 ほくらはお休み！と言つたけど！

お休み！

〔M・六七六—八〇〕

### 訳注

(1) この牧歌は、ウエルギリウスの「第五牧歌」を模倣した  
ものだが、ここでは羊飼いのメナルカスとモプサス (Mopsus)  
がダフニス之死を哀悼している。ダモン「英語発音、  
デイモン」は「第八牧歌」に現れる牧歌の歌い手の一人。  
ギリシヤ神話によればダフニスはシチリアの羊飼いで、牧  
歌音楽の創始者「RA・六九〇」

(2) Nisa ウエルギリウスの「第八牧歌」に現れる冷酷な女  
羊飼いの「同」

(3) a worm, which gnaws her fairest gourd 「悔い改め」  
「小考」(八) 52—56」の七一—七二行目「私は 夜のうちに  
成長し朝には消え去る罪と悲しみの瓢箪だ」と、その注  
(12) 参照「同」

(4) close = concealed from observation (OED close adj.)

「同」

(5) Philomel や夜鳴き鳥 (the nightingale) ピロメラー  
はアテネ王の娘。姉プロクネーの夫テレーウスに犯された  
が後に復讐を遂げた。神がナイチンゲールに化身させた。

(6) The woods sweet Syren サヨナキドリを指す。セイ  
レーヌスはシチリア島近くの小島に住む上半身女、下半身  
鳥の姿の海の精。美声によつて島の近くを航行する船人を

誘惑し、難破させたと言われる。

- (7) Primrose ヴォーンはおそらくこの様章で弟のウィリアム「一六四八年七月に二〇歳で夭折」を指していると思われる【M・七六一】【F・四三九】。ここからの六行はその弟への言及【H・二二〇】。明らかにこの弟の死を悼んでいる詩【「記」】私が誰を悼むのか知る方は【小考（九）1-4】の一〇行目に〈サクランソウ〉とある。

- (8) Such easy sweets get off still in their prime この考えは「神が心にかけて、愛する者は天上で生きるためにこの地上では若死にする」（『孤独な花』中の「生と死につらつ」）*Floras Solitudinis* (1654) : *Of Life and Death*, vi 【M・三〇三】 *and* *and*。この 'easy' は 'unconstrained' の意で使われているだろう【RA・六九〇】

- (9) true black Moores 弟トマスとケンブリッジのプラトーン学派哲学者・神学者・詩人ヘンリー・モア (Henry More, 1614-87) への論争への言及は明らか。この二人は一六四〇〜五〇年代に激しい冊子を交換し合った。その詳細は【H・二二六、九六〜九七、一四六—四七】。トマスのパンフレット *The Second Wash: Or the Moore Scour'd once more* … 1651. は、モアの *The Second Lash of Alazonomastix* への応答。Moore とヘンリー・モアとの地口を行ったのはヴォーンが最初ではない【M・七六一】。尚、ムーア人は、アフリカ北西部に住むベルベル人 (Berber) とアラブ人

(Arab) との混血のイスラム教徒。

- (10) worth oppress mounts to a nobler height ヴォーンの詩「無双のオリンダの編集者へ」【本稿後出】の一五一—一六行目「それに機智は、敬虔はもとよりだが／逆境にあつて最も栄えるもの」、及び、ヴォーンの詩集『孤独の花』の中の「節制と忍耐につらつ」*Of Temperance and Patience* 【M・二四九、10—11】「神性な光線の中には逆境にある魂から発するものがある、着火し難い燧石から出る火の閃光のように」を参照【RA・六九〇、六六八】

- (11) Palm-like 「燧石」の中の「復活前主日」【小考（十）21—22】の三九行目とその訳注（11）、及び同じく「棕櫚の樹」【小考（十一）47—49】の三、八—九行目とその注（4）参照。

尚、「棕櫚の樹」についてラドマンはローズマリー・フリーマンの見解 (Rosemary Freeman, *English Emblem Books* [1948] pp.150-51) を紹介している。醜く重さに圧倒されながらも繁茂する棕櫚の樹という中心の心象は、象徴文学 (emblem literature) には繰り返して現れて、人生での不屈とか忍耐、愛や宗教を表すが、「ヴォーンはこの心象に他の色々な連想を込め、木としては〈不滅の樹〉と、棕櫚としては勝利の王冠と、結びつけることで、象徴を示す従来のどの書物にもなかった十分に豊かな意味を与えて、元来の単純な象徴から宗教生活の本質という複雑な観念を



築き上げる…」と〔RA・六〇一〕

ヴォーンの座右銘の一つは、諺の「棕櫚の樹は真直ぐ成長すればするほど、ますます担う重さが重くなる」『The Straighter grows the palm the heavier the weight it bears』だったのではあるまいか。

(12) *Isca = the river Usk*〔RA・六九〇〕

(13) *Some great port-vein*「静脈が出てくる肝臓の扉のようなので、開口静脈と呼ばれる」(La Primaudaye, *French Academy*, [1594] ii, 356), *OED* に引用されている。〔M・七五一〕

(14) *I saw an Oak, ... a Wood-nymphs house* 弟のトマスは一六五八年に父の死後見た夢の中で「自分は父の家の中庭の前に立っていた大きな樅の木に保護されて」横たわっていたと語っているが、その同じ樹かも知れない〔H・二〇—二二〕。が、もし同じ伝でゆけば、アンピールオン「竖琴の能手」(五五行目)がマシユー・ハーバートだとすると(訳注16)その樹はフランガトック(Langstock)に(四三—四六行目)あったものかも知れない〔H・二八—二九〕参照〔RA・六九一〕

(15) *Roundel-lays = Singing matches*〔F・四四〇〕

(16) *old Amphion* おそらくチェインバースの示唆するように、かつてのヴォーンの個人指導教師 (tutor) マシユー・ハーバート (Matthew Herbert) だろう。彼はフランガトック

の教会主管者 (Rector, 1621-46) だった〔H・二七—九、一〇九—一〇、二〇—二二〕参照〔M・七六一、七〇四〕彼に捧げたラテン語六行の詩が、『アスクの白鳥』に、既に早く見たラテン語二行の詩「アスク川へ」〔小考(一) 7—8〕の次に収録されている。「かつての彼のテューターにして常に最も大切だった尊敬してやまぬマシユー・ハーバート氏へ」〔M・九三〕である。ラドラム〔RA・一三一〕とフォォーグル〔F・一二九〕のそれぞれの散文英訳があるが、簡潔な後者を訳出しておく。

「マシユー先生、私に生命を与えたのは、私の父でした。しかしある日、その生命は過ぎ去り、彼の贈物を誰にしろ憶えていることは、もはや不可能になるでしょう。明敏な判断力をお持ちの先生は父よりも先見の明に富んでおられました。私の名前は、私と共に滅び去ってしまうでしょうが、今はあなたの贈物のお陰で、私の墓の彼方で鳴り響くことでしょう。あなたの生徒を二つに分けて下さい、私のこの短くて束の間のほうは、私の父のものに、死後の私の生命は、あなたのものになるように」。

(17) *dark records* おそらく歴史のことを(寓)諷諭で表したものでしょう〔RA・六九一〕

(18) *our black, but brightest Bard* これは、Myrddin Emrys (Merlin Ambrosius) の「ジャド」トマス・ヘイウッド〔Thomas Heywood, 1573?-1641. 英国の劇作家・俳優〕の *The*

- Life of Merlin... His Prophecies, and Predictions Interpreted*  
 ... 1641. に言及してゐる' とギニー嬢 (Miss L. I. Guiney)  
 が示唆してゐる (in *Quarterly Review*, April 1914, p.356).  
 次の *The Mad-merry Merlin, or the Black Almanack*, 1653.  
 も参照 [M・七六一]
- (19) Riddles more, which future times must own 謎かけの予  
 言は数世紀に亘つて民衆に人氣があつたし、君主不在期間  
 の動乱の時期には、こういう性質の予言が多く印刷されて出  
 回つた。例えば、*The Prophecy of White King of Britain*  
*Taken out of the Library of Sir Robert Cotton...* (1643) [R  
 A・六五〇、六九一]
- (20) *Hylas* キリシヤ神話に現れるヘーラクレスの侍童ヒ  
 ユラース。彼が水を掬んでいた泉の妖精たちが彼の美しさ  
 に恋して彼を泉に引き込んで溺死させた。彼を捜し求める  
 者たちの叫び声が似てゐるところから、アマガエル (Tree  
 Frog) 「四肢の指先に吸盤があり樹上生活をする」をハイ  
 ラ (Hyla) としう。尚「パンの笛」は、長短の管を長さ  
 の順に並べて作った原始的な吹奏楽器で、牧神パーン  
 (Pan) に由来するとされる。
- (21) improve the Cross 十字架よりもっと苦しい目に遭つた  
 としう)と [L・四四〇] / 「その不運を悪化させる」  
 [RA・六九一]
- (22) Till at those wounds ... a fresher shade 『孤独の花』の
- 「節制と忍耐について」 viii 「それは殺されると生き、枝を  
 切られると枝を出す」、同ix 「立派な樅の木にみられるよ  
 うに、大枝が／粗野な手で切られると一層繁茂する／そし  
 てその鉄が作った傷から／回復するのだ もっと豊かで爽  
 やかな陰が」 [M・二四八、32-35] と比較せよ [M・七六  
 一]
- (23) the light... clouds 『孤独の花』の「読者へ」 [M・二一七、  
 35-37] 「最も明白な雲の下に明るい星々があり、光は闇の  
 中でみられるほど美しいことは決してない」と比較せよ  
 [M・七六一]
- (24) our Tar 羊を神に捧げる時の苦痛緩和剤、軟膏として  
 使われる [RA・六九一]
- タールは、石炭、木材など固体有機物質を乾留して得ら  
 れる黒色・粘性のねばねばした物質。
- (25) this じまり、「Truth」(眞理) [RA・六九一]
- (26) false, foul Prose-men おそらくヘンリー・モアへの言  
 及だろう [前掲注(9)] [RA・同]
- (27) Cast in your Garlands... ここからの一〇行をハッチン  
 ソンは引用して、「真物の哀歌の様式に慣例となつてい  
 る追悼者への勧告、それを描写しているウェルギリウスの締  
 め括り詩句のような、本当に美しい一節」だと賞讃してい  
 る。この詩の最後の八行「メナルカスの科白」の、夜の到  
 来の描写の美しさ共々。[H・二二二—二二二] 参照。

- (28) we make procession on the plains これは「祈願節」(Rogationtide)「キリスト昇天前の三日間」に畑作地を行列して豊作などを祈る行事への言及。これにはヘリック(Robert Herrick, 1591-1674, 英国の詩人、代表作 *Hesperides* [1638]) の「アンテアへ」"To Anthea" の「親愛なる人よ私を埋めて下さい／あの聖なる樫の木、即ち福音の木の下に／そこでなら私を(あなたは見ては下さらないが)思っ下されるかも知れませんか／あなたが年に二回行進して下さる時に」を参照 [H・二二二脚注]
- (29) feasts and fame = famous feasts 「有名な祝祭」 頭韻にちなむ二語「二語一意」(hendiatys)。
- (30) the Isis and the prouder Thames テムズ川はオックスフォード辺りではイシス川と呼ばれている。弟トマスは確かにテムズ川に近いオールバリー(Albury)に埋葬されたが、イシス川(オックスフォード)ではない。トマスの死については「H・一四四―四六」参照 [M・七六一]
- (31) Murray Sir Robert Moray. トマスを Albury に葬った人物。トマスの友人であり、政治家・錬金術師で化学研究の際のトマスの後援・保護者であった [H・一四四―四六]
- (32) dress and beauty = beautiful dress 「二詞一意」。
- (33) Days-eye = daisy (ひな菊、デイジー) の語源を示す綴り、語のシャレ [R・A・六九二]
- (34) the Crab and Lion 夏の数か月優勢な星座 [F・四四
- 二]／ここからの六行(タモンの科白の終りまで)は「嵐」[小考(七) 16-21]の五―一六行目「ゴシック体の挿入部とみられる二二行」と比較のこと [M・七六二]
- (35) The dregs and puddle of all ages now 世界は腐敗しながらその終りに近づいていると一般に信じられてはいたが、もっとここでは特に、おそらく一六四〇―五〇年代の惨めな状態を指すつもりだろう [R・A・六九二]
- (36) feral = funeral (*OED* feral a2) に引用されている。同語は一八一行目にも使われる [同]
- (37) State = Power [同]／ = position of importance, estate [F・四四三]
- (38) 'Tis Thyrsis calls, I hear Lycanthie bark テイルシスという名はウェルギリウスの第七牧歌に見られる。リカントは明らかに古典に出てくる名前ではない。しかしウォーンが初期の詩「ゴンボー氏へ」[M・四八―四九]、「アスクの白鳥」[一六五一]に「彼の引退した友人へ、ブレックノックへの招待」[小考(一) 8-11]の次に収録)によって賞讃するゴンボーの『エンテュニオン』(Gombault's *Entinon*)に出ひくる。ハーストの英訳(Hurst's translation, 1639, Book ii, p.65)「私はある妖精がその飼犬を声に出しては色々な時に、リカント、リカントと呼ぶのを聞いた」[M・七六一]
- (39) the Shepherds Star タへの星ヘスベラス (*Hesperus*)、

特に夕方に現れる金星 (Venus) 「F・四四四」／ウエル  
ギリウス第十牧歌七七と比較せよ 「RA・六九二」

(40) fatal Birds 「破滅をもたらす」もしくは夜の 鳥たち、  
彼らは死が訪れるぞと脅かすものと思われたから 「F・四  
四四」

(41) night (the Nurse of thoughts) 「灯火」 「小考 (十二) 16  
—17」 「ロソックの燃えてゆくのを凝視しながらの瞑想で、  
闇を恐れる魂の反応を灯火に向って語りかける形で描出し  
た作品」とその訳注 (一) 「夜は思想の母云々と『オリ  
ヴ山』にある」 参照 「RA・六九二」

(42) But joy will yet come with the morning-light 「詩篇」  
30・5 「夜の間は泣き続けるかも知れないが、朝になれば  
喜びが訪れる」 「同」

標題の「ダフニス」が、特別に目立つよう全部大文字で  
現されている集中唯一の詩で、それによって、特にウエル  
ギリウスの第五牧歌「ダフニス」からその標題と全般に互  
る様式を借りたことを暗示する。ヴォーンはこの古典詩人  
を殊に敬愛した人であるが、この詩で、とハッチンソンは  
言う、ヴォーンはウエルギリウスに最も近づき、著しく美  
しくて価値のある作品を書いたと。そして、この詩は、「  
燧石」の中の最良のものの中にヴォーンの最も優れた一

篇だと賞讃するが、しかし幾つか難解な点があり、統一性  
に欠けている憾みがある 「H・二二〇」と。

ハッチンソンは、この詩は元来、末弟ウイリアムの死  
(二六四八年七月) の追悼として書かれたものが、後に双生  
児の弟トマス (二六六六年二月二七日死去) への献呈用に改  
訂されたものと考え、その理由を縷々挙げる 「H・二二〇  
—二二」。

ヘンリー・モアとの論争 「訳注 (9) (26)」や樫の木の思  
い出 「訳注 (14)」、古代のアンピオンの見事な (羊の  
群) への追憶 「訳注 (16)」やテムズ川近くに埋葬された条  
り 「訳注 (30) (31)」などはトマスを明らかに指している。  
しかしこの詩の初めの部分では夭逝した人 (末弟) が対象  
「訳注 (7)」だろうし、ウエルギリウスが追悼するダフニ  
スは死んだとき若かったのだ。ヴォーンのこの詩のダフニ  
スは「夜にならないうちに」 (二五四行目) 旅が終って「幸  
福」だ (一一五一行目) というのだから、これは、王が処刑  
されて教会と国が完全に破滅する前、そして、この国を圧  
倒したあらゆる時代の中でも「澱や捏ね土」 (一四九行目)  
の前という意味で、これはヴォーンの、一六四〇年代後半  
の国の政情に対する見解の反映であり、王政復古後に幸せ

に職務を果していたトマスにそぐわない、云々「H・二二一」というわけで、要するに「内部矛盾」がみられるのが遺憾だというのが、正にそういう見解こそ遺憾と言うべきだろう。むしろ彼の言うような「内部矛盾」こそ、この長篇詩を含蓄深い優れた作品にした重要な要因の一つではなかったろうか。

この作品は、ウエルギリウスの第五牧歌のメナルカスト第八牧歌のダモンとがダフニス之死を悼む牧歌形式で、作者のヴォーンが先立つた二人の弟を追悼した詩である。四行以外は全て一〇音節詩行の総数一八四行（ダモンの合計一〇四行とメナルカストの同八〇行）から成る二行連句の詩型。例外の四行のうち一七行目は八音節行（Black cloud, no

rags, nor spots did stain）「ロンマニツを仮りに一音節分と見做せば一〇音節行になるか」、その他の三行は一音節行だが、五六行目と一七八行目はそれぞれその中の 'beauteous'（三音節）を二音節に、一四三行目は冒頭の 'Heavens'（二音節）を一音節に、読めば一〇音節行になる。最終行はメナルカストの 'Though sadly now we did good night!' の八音節とダモンの 'good night!' の二音節の計一〇音節である。詳説は割愛するが、韻律上も巧妙な出来栄えである。

る。

この詩の終り近くで（二七〇行目）メナルカストが突然導入する「リカンテ」は、訳注（38）に記すようにヴォーンが初期の詩で主題とする作中に登場する。この犬の名を潜在媒介にして『タレイアー』最後の作品は、二七年前に出版された『アスクの白鳥』所収の一篇と呼応する。

旺盛な読書家だったヴォーンは、古典作品だけではなく同時代の内外の多くの書物に親しんだ。そういう一冊への、彼の反応を披露した次の詩である。

「<sup>1</sup>」<sup>1</sup> Monsieur Gombauld

私は読んだ あなたの〈魂〉の美しい夜の物語を、そして見た 寡黙な〈女王〉の〈恋愛沙汰<sup>アムル</sup>〉と〈求愛〉を、彼女が〈地上〉にこっそり降りたことを、何が彼女を動かして 最初は〈天国〉を次には〈恋人〉を、〈欺か〉せた<sup>4</sup>のかを、

ラトモス山<sup>5</sup>の華々しい救出作業の際には、（ああ！）彼女が〈金切り声〉で〈大騒ぎ〉<sup>6</sup>したことが分った、深い〈神秘〉に満ちたあなたの〈日記〉<sup>7</sup>と、悲しい

〈夜間巡礼〉<sup>(8)</sup>、その際あなたが見た夢は、あなたの〈洞窟〉<sup>(9)</sup>より暗い空想に包まれていたし、〈あなたのグラス〉の睡眠薬のせいだった、あなたの魂が進んで行く時、彼女は穏やかな航海をしながら〈精霊〉<sup>(10)</sup>についてどのような談話を聞いたのだったか、どのような暗い〈小森〉を整わない護衛のままにイスメーネー<sup>(11)</sup>があなたを導いていったことか、

あなたは誇り高く、ペリアルデス山<sup>(12)</sup>の上を飛び越えるが、美しいエウロタース川<sup>(13)</sup>の川床近くで物思いにふける夜はどのような厳かな縁を近所の木陰は帯びるのか、どのような形が

木陰の作る大きな〈休息所〉<sup>(14)</sup>の中にみられるか、そこにあらるのはあの他ならぬ<sup>(14)</sup>、  
軽やかな足どりの〈自然の精霊たち〉<sup>(15)</sup>と〈妖精たち〉<sup>(16)</sup>が踏

み固める悲しい小道と座席なのだ。

彼らの孤独な生活と、〈共通の〉弱点から免れている度合、彼らが〈人間〉<sup>(17)</sup>に抱く

辛辣な軽蔑、〈木〉や〈泉〉<sup>(18)</sup>を生きる

彼らの特権、それから、あの〈一時逃れ〉<sup>(19)</sup>のうちに彼らほどのくらしい年月費すのか、ディオファニアとの

悲しい〈別れ〉のままに、そして紅涙を搾る声を挙げる〈銀梅花〉<sup>(20)</sup>の悲嘆に満ちた物語。こういう、そしてもっと

あなたの一層豊かな思想については、我々はあなたの更に珍しい空想のお陰を蒙っている、しかも

あなたは最初の〈威厳〉を失うことなく、いやしくも〈衰弱〉をさらけ出す筈もなく、あなたの活力溢れる〈月

桂樹〉は

同じ縁を帯び、様式や事物の不毛の荒廢を

軽蔑する、正にそのように私はある〈水晶のような〉

泉に馴染んできたが、それは近くの丘陵地帯から

その誕生を引き出し、穏やかに眩きながら

彼らの次の〈谷〉へとこっそり流れてゆき、そこで誇らし

気にもっと高い調子を立てる顕な流れとなり、更に

大きな音と水量をその〈水路〉に加えるので、遂には

〈増水〉で膨れ上りその流れは泡立つ大波の

気儘な大群となつて〈芝地〉や〈牧場〉を

滑ってゆき、一つの大きな名前となつて

支流の小川の溺れた名声を呑み込むに到る。

こういうのは単なる〈創作〉ではない、我々にはその同じ作品の中に〈哲学〉<sup>(21)</sup>がばら蒔かれており

真実が隠され撒き散らされていて、いずれも虚偽を、深い〈寓意〉の暗い陰の中に包み込んでいるのが分るから。

それらは〈アラス織り〉のように巧妙に織り上げられて〈真理〉と共に〈寓話〉を、〈歴史〉と共に〈空想〉を顕にする。

それでああなたはこの自らの奇抜な鑄型の中に

昔から望まれてきたあのお奨めの混合物を投げ込んで  
こういう〈意図〉をもっと遙かに変化しないものにし、  
彼らの星同様長持ちするものにするので<sup>(19)</sup>

〈国民〉とか〈太陽〉とかが存在する間は<sup>(20)</sup>  
エンデュミオンの物語は〈月〉と共に走り続けることだ  
ろう。

[M・四八―四九]

### 訳注

(1) Jean Ogier de Combauld (c.1570-1666) は *Endymion* (1624) と題する散文のロマンスを書いた。それは一六三九年に次の標題で英訳された。『エンデュミオン、ゴンボー氏によって最初フランス語で創作された素晴らしい空想物語で、今回、郷土リチャード・ハーストによって優雅

に英訳された』。マーティンはその訳者を、一六一五年に一九歳でオックスフォード大学クライスト・チャーチ学寮に入学を許可された Richard Hurst だと看做している。

[M・七〇七][RA・四八一]

エンデュミオン (*Endymion*) はギリシヤ神話で、永久の眠りによって永遠の若さを保ち、月の女神セレーネー (*Selene*) に愛された青年。

(2) night-piece 「記入」時がある日 私の傍らを過ぎて行つた「小考(九)20」に「night-piece」と出てくる。「夜の場面を表す水・油彩画、絵」。OED によればこの句は絵を表していたが後に文学作品にも用いられるようになった。Herrick's title *The Night-piece to Julia* を参照 [RA・四八一]

(3) *silent Queen* 月の女神ディアナ (*Diana*) のこと。マリラ [Ma・一九七] はシドニーの「何と悲しい足取りで、おお(月)よ、そなたは空を昇ることか! / 何と輝きを抑えて (silently) / 何と蒼ざめた顔で」と比較している。ヴォーンはおそらく当時の 'silent' の使われ方に気付いていたら、(月)に用いられると「輝きがない」の意になることだ。OED, silent 5a 及び John Carey's note on Milton's *Samson Agonistes*, 87-9 参照 [同]

(4) *To Juggle...Lover* 彼らを欺くということ。ディアナはこっそり去ることで天国を欺き、その後エンデュミオー

ンを騙した【同】

- (5) *Lamos* 小アジアの山、ディアーナが降りてきた伝説上の場所【同】

- (6) *With Lamos... a Hue and Cry in Brasse* コンボーのロマンスには、月が姿を消すことへの不安があった。月を呼び戻すために金管楽器が鳴らされた。一六三九年版の『エンデュミオン』の前には、ゴルティエ (L. Gauthier) の銅版画が付いていた【同】

- (7) *Thy Journal of deep Mysteries* 一七世紀には、*Journal* は特に「旅行の記録」か「旅日記」(itinerary) の意味になれた (*OED journal* s<sup>b</sup> 2b & a) と次の (8) 参照【同】

- (8) *sad/Nocturnal Pilgrimage* エンデュミオンはディアーナを地上で見つけられないと、夜、賢い女性イスマーネー【注(11)】の休息所まで旅をして、彼女が彼のために処方してくれる魔の服の助けを借りる。この旅で彼は恐ろしい幻を見る【R・A・四八二】

- (9) *thy Cave* ラトモス山にあるエンデュミオンの寝所【同】

- (10) *what discourse ...* *shap'd guard* コンボーが物語るエンデュミオンの旅の間の出来事【同】

- (11) *Ismena* ギリシヤ神話。オイディプースとイオカステーとの娘。

- (12) *Pertardas* ユーフラテス河の源があるアルメニアの丘陵

【R・A・四八二】

- (13) *Euratas* ラコニア (スパルタ) の主な川。「アスク川に寄せて」【小考(一) 3-6】二行目にも出てくる。

- (14) *that sad path... none but... beat* マーティンは、ハビングトンの『カストラ』所収「紳士RBへ」(Habington, *Cas-torra*, To... R. B. Esquire, ll. 29-30)「しかし彼女が私の求愛を軽蔑しても、私はとほとは辿るだろう。あの／他ならぬ何か悲しい妖精が踏み固めた小道を」との比較を促す【M・七〇七】。この妖精たちはディアーナのお付きで、彼女の休息所の護衛だった。尚、'beat' は一六五一年版の'theat'の校訂で、普く承認されている【R・A・四八二】

- (15) *A Tree, or Fountain* 「木」については次注(16)を参照。他のニンフたちは各々の純潔を維持するために泉に変身させられた(コンボーの物語にはないのだが)【同】

- (16) *Diophania... Myrtle* ディオファニアは、銀梅花の木に変身させられたが、エンデュミオンがその枝を切り取るとその木は血を流した【同】

- (17) *Nor are they... Historie* この六行、文学は楽しませる (delight) と共に教を導く (edify) べきだという当時の文学理論への言及。これは清教徒が、軽薄と不道德 (frivolity and immorality) を非難するのに対しての、誠実な文学者の防禦だった【同】

- (18) *that commended mixture* ホラーティウスの 'utile dulci'



「楽しんで役に立つもの」『詩の術』*Ars Poetica*, 343. への言及 [M・七〇七] / 同く一五行目 'sic versis falsa re-miscet' 「そこへ真実を虚偽と混ぜ合わせる」も当て嵌る [RA・四八二]

(19) *Lesse mutabile...star* 〈月〉ほどには変化しないが、同じように長持ちする [同]

(20) *And while ... shall runne* 最後の二行、ハースト訳二〇二ページの文(月)がエンデュミオンに語りかける)「月」の語りかけが何かある限り、また、彼女が(天上)で輝いている限り、あなたの名前は人々の口と記憶に留まるであろう)に似ている ([GM] Louise Imogen Guiney, ed. Gwendolyn E. F. Morgan 補注のヴォーン注釈) [RA・四八二]

三行目(一一音節)以外は一〇音節詩行の二行連句、全五二行の詩。古典に特別造詣の深かったヴォーンのこと、エンデュミオンの物語だから尚更興味を惹かれたのかも知れないが、ゴンボー氏の作品を内容に即してどのように読み取ったか、その味読ぶり(そこにヴォーンの個性が紛れもなく表れているのが感じ取れる)の的確な報告である。三九行目の「一つの大きな名前」'one great name' とは、ヴォーンに身近なアスク川であろう。この詩は、ゴンボー

氏の、作品による語り掛けに、ヴォーンが応えた、彼ら二人の「対話」と言ってもよいだろう。

ヴォーンの商品には、「誰々」[何々]「*To*」,「*A*と表そう」,及び「何々に*upon*」,「*B*と表そう」と題する詩が非常に多い。最初の『詩集』(一六四六年)の彼自身の作品二三篇のうち、*A*は九篇、*B*が一篇、『アスクの白鳥』の一七篇中、*A*は八篇、「*to*」についての悲歌「二篇、「*to*」についての碑詩」一篇を含めて*B*は六篇、『タレイアー』には前半の二二篇中*A*は一二篇、*B*は二篇、後半は既に見た一九篇中*A*は二篇だった。このような*A*や*B*は、人物や物・事へのヴォーンの呼び掛け、ないし、それらから彼が受け取った(と感取した)語り掛けへの彼の応答を表すものと言ってよく、そこに我々は「対話」を聴くことになるだろう。『燧石』の第一部・第二部全二二九篇(小考・(一)―(十三))は、神や主、イエス・キリストからの呼び掛け、もしくははそれの無さに対するヴォーンの反応の集成であり、我々はそこにやはり「在る、あるいは無い」「対話」を、聴いていたのであった。

ヴォーンは詩作によって、神やキリストと、亡き妻や弟たちと、知友の人々と(詩を献呈し合いながら)「対話」

を行ったのであり、彼の瞑想には何らかの対手が潜在していた。『タレイアー』の最後が対話体の最長篇詩で締め括られていたのは、ヴォーンの本質をいみじくも象徴するものであった。

\*

本誌前号で既に扱ったように、『タレイアー』の最初の作品群は、親しい知友四人がそれぞれ一篇ずつヴォーンへ献呈した詩で、彼の人柄ばかりかその作品への各々の通暁ぶりを反映していて、ヴォーンへの光を強めてくれた。その一番手が、オリンダからの詩「続小考（二）45-46」であった。ヴォーンが彼女に直接・間接に贈った詩が三篇ある。『タレイアー』に収録されているものからみてみたい。

無双のオリンダの編集者へ<sup>(1)</sup>

To the Editor of the matchless Orinda

ずい分久しくなる、偉大な才人諸氏が（舞台）を

時代の（道化師たち）へ譲り去って

良識に富む気高い詩作品が<sup>(3)</sup>

優れた作品同様、気に障るものとなってしまってから。

その間、詩歌の大半は（古い物語より悪いことに）ジャック・プディング<sup>(4)</sup>やジョン・ドリー<sup>(5)</sup>しか話柄にしない。

そのようながらくた賞讃者は私たちを貧しくしたし、

〈カササギ<sup>(6)</sup>〉は（詩人たち）を扉から追い出した。

なにしろ 豊かな詩作品の気難しい（精神）は

馬鹿気た低級な交際を軽蔑するのだから、

尤も 天国からの炎は たとえ（ミヤマガラス）か

〈ニシコクマルガラス<sup>(8)</sup>〉に注がれても、そのような頭を温

めはしないのだが。

そうでもなければ（詩人）たるものに、性悪な司祭同様

優れた者はめつたにない、虐げられればともかく。

それに機智は、敬虔はもとよりだが<sup>(9)</sup>

逆境にあつて最も栄えるものだ、

というのも、雷鳴<sup>(10)</sup>が私たちの空中を去って以来

彼らの（月桂樹<sup>(11)</sup>）はそれ程美しくは見えないのだから。

それはともかく、不作法よりも悪かった

あなたに私たちの感謝や被っているお陰を

表明しないのは、あなたはこれ程の退（潮期）に

私たちをこうして流通させてくれたのだから、

そして私たちが（飢饉）の恐怖を覚えた時には

私たちを稔り豊かな年にして祝福してくれたのだった。それで世間が、その不在を嘆いていると

あの栄光に満ちた当の〈太陽〉がようやく戻ってきていつもの親切な活力溢れる様子で

冷たい〈大地〉と凍てついた小川を暖めてくれるし眠たげな自然を働かせて

邪魔物を運び去ってくれるので

遂には〈花々〉と〈果実〉と芳香が

彼女の孕んだ膝から身をもたげて育ってゆく。

しかしもしそのような芳しいものの中に私たちが

自然が一度きりしか引き起こさなかった

あのような奇蹟を、見ることが出来るなら、

オリンダがそうだったような〈詩神〉をだが、

こういう魔力に圧倒された〈太陽神ポイボス<sup>12)</sup>〉自らが

彼女をあなたの腕の中に投げ込んでくれることだろうし

改めて非難されると 彼の〈木〉に口付けして<sup>13)</sup>

その若い〈女神〉をあなたに譲り渡すことだろう。

[M・六四一—四二]

### 訳注

- (1) オリンダの詩篇は、作者死後三年の一六六七年に Charles Cottereil による詩華集版で公刊された。この詩は『タレイアー』の中の最後の詩だとハッチンソンは観る [H・二一八] [RA・六六七]
- (2) great wits エリザベス朝の劇作家たちは演劇の鑑識家の間では高い評価を保持した [RA 同]
- (3) And noble numbers...grown an offence 『タレイアー』の最初から八番目に収録されている作品「詩篇を秩序立てた M・L 氏へ」[M・六二八]に既に、時代が悪いせいで「勝れていることが不運だ」という同趣旨の内容が詠われている [同]
- (4) Jack-Pudding 道化師 [同]
- (5) John-Dory フランスの私掠船 (Privateer) の船長でその掠奪品は一七世紀に大変人気の高い歌で讃えられた [同]  
人気の高い一七世紀の歌や呼び物の対象で、彼の名は軽い愚かな人なら誰をも指すのに使われるようになった [F・三九一]
- (6) Pies = pies = magpies その殊更な騒がしきで悪名高い [RA・六六七]
- (7) nice = fastidious [同]
- (8) Rooks or Daws 両方ともカラスを厳密に分類した種類

で…通常「うすのろ、ほんくら」や「おしゃべり連中」を表す換喩として使用される「Ma・三二三」。八行目には「カササギ」が出てくる「RA・六六八」

(9) And wit… best in adversity この二行、「ダフニス 哀歌調〔牧歌〕」前出の四一行目とその訳注(10)参照  
[同]

(10) the thunder 内乱の戦闘の「F・三九二」

(11) Their Laurels 勝れた詩に賞として与えられた花輪で、それは機智や敬神の念を以ってしても今では示せないもの。マリラはこれを「王政復古期の詩への評価を示したヴォーンの興味深い洞察」だとする「Ma・三二三」、「RA・六六八」

(12) Phaebus 詩の神アポロン [同]

(13) ギリシャ神話。アポロンに愛されたダプネーは、彼の抱擁を逃れようとして木になることを願ったので、神々は彼女を月桂樹に変身させてその願いを叶えた [同]

八音節詩行(五、六、二六行目の三行は九音節)二行連句の全四〇行で、詩集の編輯者に敬意を表することその詩集の作者を讃えるというヴォーンらしい凝った表現と構造の作品である。オリンダへの他の二篇は、『アスクの白鳥』に収録されている。まず、オリンダ夫妻への献呈詩である。

最善にして最大の洗練された夫妻へ  
To the best, and most accomplish'd Couple——

穏やかな天国が〈薔薇の花々〉に注ぐような

豊饒で芳醇な恵みがあなた方の冠となりますように!

彼らが〈頬〉(真珠)のような)に

まっしぐらに求愛してくる(雲)を纏う時に、  
そして彼らがあなた方の愛をまっさきに

運命づけた方によって 天上から養われますように!

一時間一時間が悉くあなた方の楽しみになるほど瑞々しく

しかも〈永遠〉のように健康そのもので

花々の最初の呼吸のように芳しく(薔薇)の

目に見えない広がりのように(内密)です、

彼が(カーテンを引かれた)頭を開き拡げて

自らの胸を(太陽の)寝床にする時に。

あなた方自身が 生活の全てを共にする時のように優しく

あなた方の鏡やそこで輝いているもののように澄み切り

天国の顔のように滑らかで、彼のように輝かしいのです

〈仮面〉や〈紗の覆い〉<sup>(6)</sup> 越しにしか あなた方には  
どのような時にも〈騒音〉などに出遭うことなく  
彼の足どりのように静まり返って平和なのです。<sup>(7)</sup>

日中の〈暖かさ〉のようにあなた方の〈安寧〉は全て  
何の〈骨折りも要せず〉、彼のように〈静穩〉ですが  
それでいて木の葉を悉くびかびか飾る束なす  
〈太陽光線〉のようにふんだんで ほしいままです、  
それで暴君熱の終った今では 彼の〈冷えた〉髪は<sup>(8)</sup>  
香って もっと穏やかな火を放っています。

それで 彼の放つあの区分された榮譽が  
彼の頭の公正な〈成果〉であるように  
というのも それ程遠く離れていないので すぐに  
彼独自の熱と光沢によってそれと知られるからだ  
丁度そのように 我らの目にするあなた方のどの枝も  
あなた方の〈複写物〉であり、我らの〈驚嘆の的〉<sup>(9)</sup>で  
ありますように！

それであな方はもはや〈地〉上に留まらなくてもよく、

天国へと再び招かれたのだから  
あなた方の高潔で貞節な炎が

お二人の麗しい名をもつあの〈子孫〉<sup>(9)</sup>となつて  
輝き、世界に教えてくれますように ああ神祕を

〈後裔〉の中に在るあなた方自身を！

だからお二人は両方の世界に 豊饒な贈物をもたらし<sup>(10)</sup>  
力を合わせて天国へと昇り、ここには〈泉〉を残すのです。

〔M・五七〕

#### 訳注

- (1) この夫妻は、一六四八年八月にフェンチャーチの聖ガブリエル教会 (St. Gabriel's, Finchurch) で結婚した「無双の、比類なき」オリンダことキャサリン・ファウラーとジエイムズ・フィリップス (Katherine Fowler and James Philips) で、それを祝つての詩ではないか〔H・八一〕  
この二人に靈感を吹き込まれたとするなら、この詩が収録されている『アスクの白鳥』が出版登録されてから五か月後の、双生児の弟トマスとレベッカとの結婚（一六五一年九月二八日）も作者の念頭にあったかも知れない〔M a・二二五〕〔RA・四九三―一九四〕

- (2) they = *Roses*.
- (3) *heathhull as Eremite* 東の間の世界は腐敗の状態にあるので、*hull*では何ものも究極的に「健康」といえるものはない [RA・四九四]
- (4) *Close = Private* [同]
- (5) *clear...shines there* 「君の恋人の鏡やそいで輝いてゐるもののように滑らかで」 (*Donne, The Calm*, 8) と較べてみよ [同]
- (6) *Mask, or Tyfanie* 雲。「ティファニー」は貴婦人たちが顔の白さを太陽から護るために用いた [同]
- (7) *as silent as his feet* この「彼」は前行の「時」*time*。「時は…静まり返った足どりで去ってゆく」 (*Thomas Powell, Human Industry*, 1661, p.3) 参照 [同]
- (8) *his Cold locks* アポロン神の髪だと考えられていた太陽光線。この奇想は以下の連にも続いてゆく。『*The Eagle*』 [M・六二六―二七]の二二行目(「太陽」とそのばらけた(髪)に直面する)がある [同]
- (9) *Heirs* マリラが注目する「髪」*hairs* との地口だ。前の第五連で発展させられた奇想の続き [同]
- (10) *both worlds* あなた方と(後裔)両方の。

一行目の一〇音節とその他の八音節の詩行から成る二行連句の六行詩六連に、一〇音節の対句が追連として付く構

造の作品。「のように」<sup>(1)</sup>を連発する祝婚歌によって新婦を讃える。そして、当人を賞讃する詩となる。

見事な洗練の極み K・フィリップス夫人に<sup>(1)</sup>

To the most Excellently accomplish'd Mrs. K. Philips

ねえ 機智に富む美しい人、どの〈天体<sup>(2)</sup>〉から あなたがここに放ったこれほど豊饒な詩が流れてくるのかしら？

確かに、素晴らしい〈呪文〉は そこから やってきて、あなたの〈読者〉を嘩然とさせる。

詩の一篇といえどその韻律は、〈貞節な恋人たち〉や 時の足どりのように優しく拍子を打ち、

そこでは言語は〈微笑み〉、抑揚<sup>(3)</sup>はあなたの〈眼〉の ように機敏に人を心地よくしながら上昇し、

その〈詩〉は滑らかで、どの一行もあなた自身の ように柔和で それでいて〈男性味に富<sup>(3)</sup>〉んでいる、

そこでは〈粗末な〉瑣事が 時代から 借り出された事柄でページを汚したりせず

思索は〈御使<sup>(4)</sup>い〉の常のように

〈無垢〉であり、死を迎える〈聖人〉のように高度だ。

こういう〈歓喜の声〉は 私が初めて<sup>(5)</sup>

〈詩〉の中に新たな奇蹟の数々を見た時のこと、  
それも一人の手によるもので、それに口付けするためなら

彼らの〈神〉も

自らの〈月桂樹〉や〈泉〉を失ってもいいと思う程のもの  
だった、

私の、それに較べると乏しい(流行に反した)〈天分〉は  
黙って賞讃しながら眠っていた、

〈救い<sup>(7)</sup>〉なのだが、重々しくそう見せかけることで

ふりをする人々はしばしば賢いのだと思われてきたのだ、  
それでも〈巡礼者たち〉が 大いに礼拝する

あの〈神殿〉に 慎しく触れる時のように

また、〈雲〉が〈求婚〉しようとして群がり

〈太陽〉への〈仮面〉になろうとする時のように

正に私は結論づけたのだ、確かに

私は遠くからあなたを 〈ペルシヤの信奉者〉として<sup>(8)</sup>  
崇め、あなたの光こそが私にその道を

示してくれたのだと言ってもよさそうだと。

そういうわけで〈磁鉄鉱<sup>(10)</sup>〉はもつと鈍い<sup>(9)</sup>〈鋼<sup>(11)</sup>〉を導き<sup>(12)</sup>  
高度な完成品は それだけに余り動かない

〈車輪〉なのだが、それというのも神の贈物は

〈生命線<sup>(12)</sup>〉に吊されており

その線があなたによって触れられ あらゆるものの中に

〈普く美しい気質<sup>(13)</sup>〉を〈掻き立てる〉のだから。

そしてこのために私は(最も適しい真実だが)

私の弱い〈木霊〉をあなたの才智に付け加えたのだ、

それを許して下さい、〈あなた<sup>(14)</sup>〉、このような目立たない

〈試金吟味<sup>(14)</sup>〉は あなたの〈月桂樹〉を萎ませるかも知れ

ないのだから、

あたかも〈並みの〉手が〈花々〉を汚して

そこに宿る露にそのしくじりを嘆かせるように。

しかし私はその汚染を洗い流して 誓おう

〈月桂樹<sup>(16)</sup>〉は育たない、あなたの〈額<sup>(16)</sup>〉のためにしかと。

「M・六一—六二」

### 訳注

(1) 「無双の、比類なき」オリンダで、彼女の詩をヴォーンは草稿で見っていたに相違ない(印刷される十三年前に彼女の詩には馴染んでいた「H・八一」)。ヴォーンとオリンダ二人の関係については Philip W. Souers, *The Matchless Orinda* (Cambridge, Massachusetts, 1931), pp. 71-73, を参照

【F・八六】

- (2) from what Sphere オリンダの詩と天体の音楽が共通の源を持っていることを暗示するもの【RA・四九九】
- (3) *Masculine* = strong, vigorous 「強く、活力溢れる」【同】
- (4) matter borrow'd from the age 同時代のぐだらなるもの 当てつけ【同】
- (5) These Raptures ... in Poetrie ランドルフ【Thomas Randolph, 1605-35. 英国の詩人・劇作家】の『詩集』の前に付されているI・T・A・M・なる署名者の称揚詩の「尊い精神よ、私が初めて／そなたの詩の天分を見た時」及び同じランドルフの「ロウランド・コロットン卿についての…哀歌」四行目の「詩の中のある新しい不可思議な奇跡、富」と比較せよ【M・七一〇】
- (6) And by a hand ... but to kisse アポロンだったら口付けするために自分の月桂樹と泉を棄ててしまいそうならばの手によって書かれた【RA・五〇〇】
- (7) A Rescue ... past for wise うすのろが賢い振りをするのに頼りとするもの。OEDは'rescue sb.にこの意味を与えてくれないが、'rescue sb', 'rescours sb'and 'sb'参照【同】
- (8) A Persian Votarie...me the way ウォーレンは自らを太陽崇拜のゾロアスター教徒に譬えている【同】／東方三博士への言及【M・七一〇】
- (9) your light shew'd me the way 「特色 エレミアムへ」【後

出】四六行目と比較せよ【RA・五〇〇】

- (10) So *Ladestones* guide the duller *Steele* 磁鉄鉱と鋼は「アモレットへ、彼と他の〈恋人たち〉との違い…」【次号で扱う】の二九―三〇行目にも出てくる【同】
- (11) high perfections ... moves the lesse オリンダの完成品は「プリムム・モービレ」(the *primum mobile*)【トレスミー (Prolemy) の天文学での第十天】のようなもので、それ自体は動かないが、他の天体の動きに責任をもつていた【同】
- (12) a *Vital line* 少くともプロティノス (Plotinus, 205?-270?) 「エジプト生れのローマの哲学者、新プラトーン主義の創始者」にまで遡る考え。彼は魂を「あらゆるものを通じて全ての点で、全体性に内在するもの」と考えた (*Enneads*, translated by Stephen Mackenna, 2nd edn [1956], p.528 [v1.4.12]) ／「生命線」上で動く個人の魂の力に關しつゝ Thomas Vaughan, *Anthroposophia Theomagica*, p.47. 特に「彼女は…自らの考えを吹き込んで不在のものに、距離はそれほど大きくせずに伝えられる」を参照【同】
- (13) Affections *Epidemical* = universal (good) dispositions (OED affection sb4 & epidemical a2) 【同】
- (14) Assays = early attempts (OED assay sb 16) 【同】
- (15) blast your Bayes = Spoil your reputation (名声を損なふ) 【同】



(16) *Laurel* = laurel, bay (laurel), sweet bay, true laurel (ラウレル)。花言葉は 'glory and victory' (栄光と勝利) や 'success and renown' (成功と声価)。

単独で数々の奇蹟を実現している詩だと、意匠を凝らしてオリンダの作品を讃えた。「私の、それに較べると乏しい(流行に反した)〈天分〉は／黙って賞讃しながら眠った」(My weaker Genius (crosse to fashion) / Slept in a silent admiration.) という一九、二〇行目の九音節の二行以外は全て八音節詩行の二行連句、四四行の力作である。こうして、オリンダへの献呈詩も、初期の『アスクの白鳥』と後期の『タレイアー』とで、単純でなくひねった有り方で呼応し合っている。

『タレイアー』の前半最後に、先刻述べたAが並んでいる。「エテシア詩篇」と呼ぶことにしたい七篇である。順に続けてみてゆこう。

エテシアへ(ティマンダーに代って)<sup>(1)</sup> 最初の一瞥  
To Etesia (for Timander,) the first Sight

あの晴れた〈夜〉、微笑んでいたどの〈星〉<sup>(2)</sup>が  
あなたを〈誕生〉させ 私にこうして〈見〉<sup>(3)</sup>せて  
くれて 辛辣ではあるが親切な〈物腰〉で  
私を〈臣下〉にしたのだろうか、あなた 〈女王〉が?  
そのきらめきを放つ 〈天体〉が今やあなたの  
〈眼〉の中に入り込んで 下方で輝いている、  
そこではもっと身近に もっと鋭い力を  
それが發揮しているのは 議論の余地がない、  
というのも 昨日知ったばかりの私は  
もはや火が好きでないのだから、その後明るい  
表情を失くした冷たい〈雪〉ほどにしか、  
それでも讃えて求めなくてはならない 私の〈太陽〉を。  
以前 私は風のように自由に歩いてきた。<sup>(4)</sup>  
(それと同じ様に) 唯、思いやりのないままにだっただが。<sup>(5)</sup>  
私は大胆な〈鷲〉のように凝視めることが出来たし  
表面によって目を晦まされもしなかった、  
私が見たものは そなたを見るまでは  
単なる奇形ではなかったのだから。  
そのような形が(そなたの形と並んで) 現れるのは

〈アラス織り〉とか 宿屋の看板の中であり<sup>(7)</sup>

そのせいで私は ただ探し出すつもりになるのだ<sup>(8)</sup>  
もつと良いものを、店の中にあるのを。

だから或る店は、〈蔓〉を所蔵の〈葡萄酒〉に絡ませて<sup>(9)</sup>  
表示する、〈葡萄〉ありと。

あの、ある日は微笑み 翌日は項垂れる<sup>(10)</sup>

王侯然たる（如何なる暴風雨ものともしない）〈花々〉、  
あの粹な〈チューリップ〉と〈薔薇〉、

具体化された〈諸々の観念〉を頭<sup>あたま</sup>に示すのに  
用いる人もいる表象、それらの仄かな恩寵も

そなたの顔にとつては単なる詐欺にすぎない。

そなたは別だがあらゆるものの中にある自然が  
実践するのは 〈詭弁〉<sup>ソフストリ</sup> だけだったのだから、

そうでなかったら 彼女を見てあらゆるものは  
どれ程自然とは衣装次第で様々な姿になれるかを示せたで

あろう、

しかしそなたは鍛えられたので 我らには見えるかも知れ

ない

〈完璧〉が、〈多様性〉ではなくて。

あなたは観てきただろうか どれ程 〈日の星〉<sup>(12)</sup> は

遠くからきらめきを放ち、微笑み、輝いて

その拳句 凝視めている人に伝えるものかを

沈黙はしても貫き通す力のある 〈光線〉を。

それで私の恋人は傷つくが 彼女の 〈眼〉 は

〈諸々の効果〉を もつと快適な 〈空〉 を 見ている。

きびきびした明るい 〈動因〉<sup>(13)</sup> がその空から 〈流れ出る〉、

矢ではなく その光で武装されて、

そして身に滲みる静寂で我らの心臓を打つ、

騒音で惑わせるわけにはいかない、彼も、彼の投げ矢も。

彼は私の従順な 〈魂〉 に働きかけて

直ぐ説得し それから制禦した、

そして今 彼は飛び回る（それで私は承諾する）

私の血の中を 火の翼を駆使して、

それで私が（そんなことには決してならないのだが）

冷え冷えと絶望しながら その熱を鎮めようとすると

その悪意に満ちたものをエテシアは名指しして

しかも新しい燃料だと 私の炎の悉くを言う。

[M・六四三―四四]

訳注

- (1) トマス・パウエルのヴォーンへの献呈詩「続小考(二) 47-49」の訳注(5)(6)参照。
- (2) おそらく修辞疑問、その答は惑星の金星(Venus)で、恋人たちに好意を示し、エテシアのように愛を鼓舞する人の誕生を適切に支配する。五行目の、*That sparkling Planet*と同じ「RA・六六九」
- (3) a kind *Aspect* the keen 金星の相、あるいは占星術の力で、好意に満ちているが苦痛も与える「同」
- (4) free as the wind 「ヨハネによる福音書」3・8「風は思いのままに吹く」「The wind blowth when it listeth」が示唆するように諺ふう「同」
- (5) この連と次の連では二人称の代名詞がそれまでの「あなた」「you」が「そなた」「thou」に変わる。最終連最初の「あなた」は読者への呼び掛けであろう。最後になって固有名詞のエテシアが現れる。最初に出席した時の、語り手の微妙な心が示されているよう。
- (6) And if but stay'd (like it,) unkind 「彼は風のように、自分の自由を妨げるものに不屈の力を揮った」「Ma・三二六」
- (7) Like daring Eagles gaze 鷲は太陽を凝視できると思われつた「RA・六六九」
- (8) In Armas, or a tavern-sign タベストリー風の壁覆いや

宿の外に掲げられる粗描き絵で「同」。アラスはフランスのPas-de-Calais県の県都、アラス織は美しい模様のあるつづれ織り。

- (8) And do but..in store 他の形(formis)が彼に理想を、即ちエテシアを探させた「同」
- (9) So some hang by...a Vine 中でワインを供することを示すために宿屋の看板上に蔓を垂れ下げるのが習慣だった「F・三九四」
- (10) 蔓の繁みは神話のバックス神との連想から宿屋の外に印として吊されるのに用いられた「RA・六六九」
- (11) この箇処、「葡萄酒」で「葡萄」を、「葡萄」で「葡萄酒」を表す換喩(メトニミー)。
- (10) Those princely Flow'rs...Bodied Ideas この五行、カメラリウスの『象徴と表象の「世紀」』(「懇請」「続小考(二) 36」の訳注(9)参照)は、植物相と動物相を扱う表象の書物の中で最もよく知られていた。チューリップとバラはその中の表象の顕著なもの「RA・六六九」
- (11) Or else she made them ...not Variety この四行(自然)の多様性はルネッサンスのありきたりの事柄だった「RA・六七〇」
- (12) Day-star 太陽(詩語)「同」
- (13) Agent キュービッドの力にも匹敵する活動力「同」

五一、五二行目（九音節）以外は全て八音節詩行の二行連句、全五四行の作品。エテシアについては、トマス・パウエルのヴォーンへの献呈詩「続小考（二）48」の訳注（5）に記したように、「エーゲ海一带に夏季に吹く北風で、ギリシャ特有の夏の青空をもたらす」「エテシア季節風」に由来する女性名で、ヴォーンの最初の『詩集』（一六四六年）のアモレット（次回扱う予定）と同一人物とも看做される。「H・五一―五二」が、殆ど実証はされていない「F・三九三」。

### 特色<sup>(1)</sup>、エテシアへ The Character, to Etesia

行つて捕まえてよ<sup>(2)</sup> 〈不死鳥<sup>(3)</sup>〉を、それから持つて来てね  
羽柄<sup>(4)</sup>を私に 彼の翼から引き抜いて。  
私に下さいな 〈乙女美人〉の〈血〉を、  
汚れない、純粹で濃厚な〈深紅〉を、  
鈍い韻文では到底与えられない  
あの生命のままの甘美な〈赤面〉の裡にあるのを。  
次は手つかずの染み一つない白を求めて、  
真黒な物事が紙には書かれているのだから、  
エテシアよ、そなたの〈自腹〉を切つて

私に与えて下さい 無垢な〈部屋着<sup>(5)</sup>〉を。

時々そここの〈泉〉がそうだったように<sup>(5)</sup>

ある〈泉〉が純粹な〈乳〉を注ぎ出すと

注がれた〈雪白の〉流れの中で見えるのだった

カーネーションが各々血に染つた頭を洗い合うのが。

そうこうするうち現れる〈渦巻〉は次々に（そなた同様）

微笑みながら擧めつ面をみせた。

そういうものは しかも非常に瑞々しくて

ただ何となくそなたに〈似たもの〉になるのだった。

そなたは暗い世界の〈明けの明星〉だが

唯、遠方からしか見えない、

そこでは〈天文学者たち〉のように我らはそなたの

顔の燦然たる輝きを凝視<sup>(6)</sup>するのだが

もはや知り合いには全く出会えないのだ、

尤も我らは自分の生命は悉く見詰めて〈切望する〉が。

そなたは自分自身だけが一つの世界なのだ、

のみならず三つの偉大な世界が一つに精煉されている。

それでこれら全てが示されて、そなたの〈眼〉の中に、

輝く〈東方〉と、〈樂園<sup>(9)</sup>〉が見えてくる。

そなたの〈魂〉（最初の〈火〉の〈火花〉の一片<sup>(10)</sup>）は

〔太陽〕のようで、世界が求め欲するもの。  
そして一層気高い影響力を揮って

あらゆるものに働きかけて 感じ取れと要求する、  
しかし〔夏〕になっても熱は全く出ないし<sup>(1)</sup>  
霜に晒されてもやはり陽気なままだ。

〔花々〕といえば それぞれ精妙な衣装の他に  
濃厚な匂いを備え、しかも〔甘美な風情〕をもつ。  
それがそれとなく欲望を吹き込んで

我らに褒め讃えるよう無理強いさえる、  
そういつた具合に悉く無邪気なのだ

その〔魅力〕は全て、そなたが分配するのだから、  
そして公正な〔自然〕同様、〔手管〕なしで

直ちにそういう魅力は我らの心を捕らえて喜ばせる。

おお そなたはそういう人なので 私はどうしてもなくなって  
しまう 〔偶像崇拜〕と言えそつな程にそなたが好きに！

私は天国からさ迷い出せし そうすべきだった、  
だが そなたの生命が私のにその道を示しているの<sup>(12)</sup>  
しはしの間は〔至上の方〕に任せられるし そうすべきだ

ろう

ここ、そなたの中で 彼の方の〔心象〕を助長するのは。

訳注

(1) 特色とは、ある人物の資質の輪郭描写のこと〔RA・六七〇〕

(2) Go catch …the Robes of innocence この十行の一連の不可能な使命は、ダンの「歌」の「行つて落ちてくる星を捕まえよ」(Donne's Song, 'Go, and catch a falling star' 1-9)の反響かも知れない〔同〕

(3) Phoenix ヴォーンの英訳「クラウデウスからの不死鳥」〔M・六五六—五九〕参照。そこでのこの伝説上の鳥は、ヘーロドトス ii・77 に基づいている〔同〕

〔燧石〕の「復活と不滅」〔小考 (三) 22—24〕の二九行目にも「不死鳥」の如き再生」と使われていた。尚、次行の「羽柄」(quill)は、おおばねの基部で羽板(web)のない部分の中空の軸。

(4) For blackest things on paper write ㄐ)の'write'は'are written' 明らかにこの動詞が受動態で使われる稀な自動詞用法。OED に記載される最も早い例は一八六二年【Ma・三二八】

(5) as sometimes Springs have done バイブルと古典文献で。例、「民数記」14・8「乳と蜜の流れる土地」、オウィディウス「転身譜」I・iii「乳の流れと神酒の流れが続い

ていた」[同] [RA・六七〇]

(6) their *blond* heads 語源上の連想が 'clove-pink' (丁香に似た芳香のナデシコ (pink) 科の植物) としてのカーネーションと、'生肉 (carnal) に似た色合い」としてのカーネーションとの間で行われた [RA・同]

(7) three great worlds refined to one 小宇宙理論 (microcosmic theory) の言及。これには E. M. W. Tillyard, *The Elizabethan World-Picture* を参照 [同]

(8) all those 前行の三〇(地上、天上、精神上)の偉大な世界 [同]

(9) The shining East, and Paradise 光の源としての(東方)にについては注(2)の「クラウディウスからの不死鳥」——六参照。楽園は東方のどこかに位置するものと信じられていた [同]

(10) Thy Soul (a Spark of the first Fire) ストア哲学の信念を反映している。ヘンリー・モアの「(神性)の火花とか光線は地上の霧の中で曇らされた…」(Henry More's *Pre-eminency of the Soul*, 19-20) 参照 [同]

(11) in Summers hath no fever 盛夏の時の不健康な暑気は、熱の原因と思われていた [RA・六七二]

(12) But that thy life shews mine the way 「見事な洗練の極み K・フィリップス夫人に」[本稿前出]三〇行目「あなたの光こそが私にその道を示してくれたのだ」と比較せ

よ [M・七五九]。あそこのオリンダは詩作上の道を、このエテシアは倫理上のそれを示す [RA・五〇〇]

八音節詩行の二行連句、四八行の詩。初めて出逢った時から、彼女の特色を描写する作品に移る。そして或る日の物思う彼女を想うに到る。次の作品である。

自家の窓から満月を眺めているエテシアへ

To Etesia

*looking from her Casement at the full Moon*

あの 年取っても気力の衰えない美しい(女王)が見える  
だろうか？

彼女の(お供)は(蒼穹)で、金色の炎で飾られている。  
私のもっと晴やかな恋人よ、(東方)に(眼)を据えて  
見てごらん、あの(雲)の寝床を、彼女はそこから起き出  
してくる。

私に最も関わりの深いあの短い一時間で<sup>(1)</sup>  
他の何ものにも勝る最大の力を彼女は得たのだった。  
これで私の(運勢)は風のように移り気になったが

〈愛情〉は私の揺るがぬ不変の心になった。

彼女は〈星々〉の涙を私の養分にしてくれたので

私は〈悲しみ〉を吸い込んでその〈影響力〉を得た。

微笑んでいる人々には 彼女は多くの光を放った、

悲しい〈蝕<sup>2</sup>〉状態にある私には 彼女は静かに語りかけた。

彼女は自らの〈天体〉の動きで私を屈服させ 感じ取らせ

たのだ。私が初めのうち恐怖しか覚えなかったことを。

しかし私が成〈年〉に達し、彼女の〈支配〉の及ばぬま

でになって、自分の自由は自分の思うがままとなると

私は〈運命〉の〈諸法則〉に確かに応えて<sup>3</sup>

自分の〈理性〉を自らの重要な〈擁護者〉にした。

私は自分の正当な権利を受け継ごうと骨折った。

しかしその時(おおエテシア、聞いて下さい!) 私が

自分自身を取り戻したりしないようにと、私の不親切な

〈星の母〉は

私の哀れな〈心臓〉を掴んで それを他の人に与えたのだ。

[M・六四五―四六]

れてくるのかかる時間 [RA・六七一]

(2) *sad Etesias* 「蝕」は不運の魁と考えられていたので

「悲しむ」のである [同]

(3) *I did reply : : my great Advocate* ルネッサンス期の哲

学者は、星々に表されている運命とか宿命の絶対的な支配

に抗する、理性に導かれる自由意志の力を、主張した

[同]

(4) *another = Etesia* [同]

冒頭行と最後の二行が一一音節の詩行で、それ以外は一

〇音節の二行連句、二二行の作品。

彼から別れて振り返っているエテシアへ<sup>(1)</sup>

*To Etesia parted from him, and looking back*

おお〈微妙な恋人〉!そなたの〈平和〉は〈戦争〉なのだ、

傷跡をつけずに傷つけて殺すのだから、

如何なる感覚にも知られずに作用するのだから、

〈摂理〉の〈天命〉のようだ、

しかも不思議な沈黙で私を射抜くのだ、

〈愛〉の〈火〉は〈雷〉のように降ってくる。

訳注

(1) *that one short hour / Which most concern'd me* 生十末

彼女には〈矢筒〉はないのか、私の〈心臓〉以外に？<sup>(2)</sup>  
彼女の〈矢〉は全てその部分を射当てるに違いない？  
〈天国〉のような美の極地、その〈贈物〉は振る舞う筈  
私たちを破壊するようにではなく、癒すように。

〈愛〉の不思議な〈業<sup>わざ</sup>〉！それは健康にしてくれる、  
だが、それでいて、傷を悪化させもする、  
私の心を休ませようと彼女が採った表情は  
それを貫いてその痛みを和らげてくれた。

[M・六四六]

### 訳注

- (1) 標題は William Habington, *To Castara, Looking Back at Her Departing* 「別れに当って振り返っているカスター」  
と較べよ [RA・六七一]
- (2) *Hath she no Quiver, but my Heart?* カルーの「愛の一  
時休止を懇願されて」の中の「我が心臓は／矢筒に作られ  
ている、そこにはないままで／他の投げ矢を入れる空いた  
場所は」(Thomas Carew [1598?-1639? チャールズ一世  
の廷臣で、晩年のペン・ジョンソンを取り巻いた詩人の一  
人] *Truce in Love Entreated*, 1-3) と較べよ [同]

八音節詩行の二行連句一四行の作品。次にラテン語八行  
の詩が続く「M・六四六」。フォーゲルの英語散文訳「F・  
三九八」で見てもよい。

涙を流すエテシアについて

In Etesian lachrymantem

おお 甘美な悲痛、どのような笑いよりも強烈なので、そ  
れにこのような輝かしい星々が自らの涙で栄誉を与えるの  
だ！ 何と静かなことか、彼女の啜り泣きは！

それでもその泣き様は 彼女の顔の明るい魅力をすっかり  
曇らせて、同情されながら泣きの涙になる。涙の滴が彼女  
の頬を、彼女の眼のように輝く宝石を、飾り立てて、彼女  
の肌色そのままの天然の薔薇に、暖かな驟雨を振り撒く。  
ねえ、カルデアの人々よ、どのような不運が私を懲らしめ  
ることだろうか、美しい 雲一つない日が 突然滅んでし  
まう時には？

[F・三九八]



訳注

(1) Chalkai チグリス川、及びユーフラテス川流域から興り、バビロニアを支配するようになった古代セム人種。神学の知識と占星術で有名だった。それ故に最後にカルデア人を呼び出したものか。

エテシア宛ての七篇の詩の中で、何故この一篇だけがラテン語で書かれたのだろうか。窓から満月を眺めていてから海を越えてゆくまでの彼女が「私」に与える衝撃を少しでも和らげるために、涙を流すエテシアはラテン語で書かれなければならなかったのか。

海を越えゆくエテシアへ

To Etesia going beyond Sea

行きなさい、もしあなたにどうしても必要なら！でも留ま  
って——知って  
心にとめて下さい行く前に、私の誓いを。

全ての事柄に、唯、〈天国〉とあなた以外に

〈心〉のたけを籠めて、私は言った〈さらば〉と！

今はあの幸せな〈陰〉へ行くことにしよう  
初めて私が 美しい我が〈敵〉<sup>1</sup>に逢った所へ。

私は沈黙の徑を各々尋ねよう、私たちが

正に歩いた所を、あなたが私と一緒に座った所を、

私は再び座ることにして、決して休むまい

あなたが押しつぶした花を幾つか見つけられるまでは。

それで私は 我が臨終の〈心臓〉の近くに居続けよう、

そしてそれが〈露〉を欲しがるときには泣くことにしよう、

悲し気に私は反復しよう 過ぎ去った〈喜びの数々〉を、

そして〈言葉〉を、あなたが時々声に出したのを、

私はあの〈森〉に耳を傾けよう、そうすれば聴こえるだろ

う その〈木霊〉があそこあなたに答えるのが。

でも 長い留守に飢えて 私は

残された〈幼児たち〉のように、遂には泣き叫ぶのだ、

そして〈涙〉を（彼らなら〈乳〉を）啜ることだろう

あなたがやって来て、私を抱き締めてくれるまで。

[M・六四六—四七]

訳注

(1) my beautiful foe 婦人を「敵」と呼ぶのは恋の詩で長

らく確立していた奇想（コンシート）で、ペトラルカと彼の「優しい戦士」‘Sweet warrior’にまじり過ぎる。「アモレット溜息」[次号で扱う]六行目「私の愛しい敵」‘my lovely foe’と較べよ[R A・六七二]

エテシアを「美しい我が（敵）」と呼んだ六行目（九音節）以外は全て八音節詩行の二行連句二〇行の作品。直前の詩で、彼から別れて振り返っていた、涙を流すエテシアは、愈々海を越えて行こうとする。それに向って、どうしてもというなら行きなさい、しかしその前に立ち止って私の誓いを知って心に留めて欲しい、と切ない未練をみせる「私」だが、彼女は遂に、彼の前から姿を消す。

### 不在のエテシア *Etesia absent*

愛、〈世界の生命〉！ 何たる悲しい死

であることか、そなたの不在は？ 我らが呼吸を失って  
直ちに死ぬこととは 唯、生きることの拡大版にすぎず

〈脈搏〉と〈空気〉の僅かな停止予さえ

無くなること、それがどんより戻ってくることと

辛うじて〈循環する〉ことを 〈魂〉は悼み嘆くのだ。

しかし 生きながら死んでいることと、絶えず

希ってはいても決して自らの意志を持たないこと、

取り憑かれながらも免れること、

真物ではあるが不在の至福と結婚すること、

などは いつまでも失くならない苦痛であり、その痛みは

〈心臓〉を切り刻み 拷問にかけ 磨り砕くのだ！

我らにとっては別々のものと思われる

そういう状態での〈魂〉と〈肉体〉とは

生きているとは言い難い、再び一体に

なるまでは、そうなれば毎日毎日と緩やかな

歩みの四季とは満たされるわけだから。同様に無駄なのだ

何時間も何分間も（時間）の長い列

私がそなたを探しても、また、そなたが見えなくなれば

私の〈魂〉から離れた生命と光とを探すのと同じことで。

何故って、そなたの〈眼〉が私の上に確かに輝くまでは

私の眼はしっかりと閉ざされていて見えないのだから。

[M・六四七]

訳注

- (1) *Pulse and Air* 英国の医学者ウィリアム・ハーヴェイ (William Harvey, 1578-1657) は、血液循環の原理を一六六一年に発見して講演し、一六二八年にその結論を公刊した。呼吸の生理学も同時期に探求された。ヴォーンはそれらを知っていたことを示すもの [F・三九九] [R・六七二]

- (2) *reprieve* (OED) *reprieve* sb. le) 脈搏と呼吸は死を遅らせる。この語は「拡大された」生命 [R・A・同]

- (3) *whose dull returns / And narrow Circles the Soul mourns* 肉体とその機能の全ては魂を閉じ込めており、魂は純粹な精神になる時を待ち望むのである [同]

- (4) *As Soul ... Reunion* この四行。魂と肉体とは死ぬと分離する [「死 対話」] [小考 (三) 21-22] [二七-三二行目] が、キリスト教の教義によれば、復活すればこの両者は再び合体する [同]

この、八音節詩行二行連句の二二行で、七篇から成る「エテシア詩篇」は終る。出逢いから別れに到り姿を消してしまふまでの「愛しい人」を、「あなた」*'you'* と「離れた」*'thou'* の使い分けによって彼女への語り手の思いの遠近を巧妙に表しながら描き出す。恋人のもたらず平和は戦

争だ、愛の火は雪のように降る、愛の業は人を健康にしなから傷を悪化させる、など警句ふうの詩句も駆使して、愛の諸相、本質を思索し追求したものと思われるが、この詩篇は初期の六篇から成る「アモレット詩篇」と遠く近く呼吸する。それについては次稿で検討したい。

\*

ヴォーン最後の詩集『甦ったタレイアー』の表紙題扉には、ウエルギリウスの『詩選』(別称『牧歌(田園詩)』*Elogue vi.2* から「タレイアーは森に棲むものに頬を赤らめなかった」が引用されている。著名な錬金術・博物学者だった双生児の弟トマス(一六六六年二月二七日死去)の詩数篇がこの詩集には一緒に収録されているので、その著書の一冊『光より出づる光』*Lumen de Lumine* (1651)の中でタレイアーを「我が恋人」と呼んでいたこの弟への敬意を込めて選んだ書名であろう [R・A・六四三] が、弟に甦ってもらいたいという希いと共に、当然ながら、『燧石』以来詩作を世に問わなかった自らも、詩の世界に甦ったと宣言する意味 [H・二一四]でもあったろう。かつて自らを「アスクの白鳥」に擬したヴォーンは、今度はタレイアーに支援されている自分を密かに期したものとみえる。

\* 参考文献

本誌『成城文藝』第二二一号(二〇一〇年六月)の拙稿末尾(二四—三〇ページ)を参照されたい。こゝには本稿での直接参照文献のみを挙げる。尚、本稿中、「小考(一)」～「小考(十三)」は、本誌既連載の拙稿(第一九九号「二〇〇七年六月」～第二二一号)を指す。

〔続小考(一)〕「補遺と増幅—ヘンリー・ウォーン、『火花散る燧石』以後の」『成城文藝』第二二五号、1947、二〇—二一年六月。

〔続小考(二)〕「思いは弱まることなく—ヘンリー・ウォーン『魅ったタレイヤー』の世界」『同』第二二六号、29—56、二〇一一年九月。

〔C〕 Chambers, E. K., ed. *The Poems of Henry Vaughan, Student*. Introduction by H. C. Beeching. 2 vols. London and New York: Charles Scribner's & Sons, 1896.

〔F〕 Fogle, French, ed. *The Complete Poetry of Henry Vaughan*. New York: Doubleday. 1964; New York University Press, 1965.

〔H〕 Hutchinson, F. E. *Henry Vaughan: A Life and Inter-*

*pretation*. Oxford: Clarendon Press, 1947.

〔J〕 Leishman, J. B. *The Metaphysical Poets: Donne, Herbert, Vaughan, Trakherne* Oxford: Clarendon Press, 1934.

〔LH〕 Lyte, H. F., ed. *The Sacred Poems And Private Ejaculations of Henry Vaughan*. Boston: Little, Brown and Company, 1854.

〔M〕 Martin, L. C., ed. *The Works of Henry Vaughan*. Oxford: Clarendon Press, 2nd ed. 1957. 本稿の底本。

〔Mv〕 Marilla, E. L. *The Secular Poems of Henry Vaughan*. Uppsala, Harvard and Copenhagen, 1958.

〔RA〕 Rudrun, Alan, ed. *Henry Vaughan: The Complete Poems*. New Haven and London: Yale University Press, 1976.

〔W-J〕 Wilcox, Helen, ed. *The English Poems of George Herbert*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007.